

歴史 探訪

「つしつしまへの系譜」



生活が求め、誇りが築いた 暮らした息づく 喜多方の蔵



全国的にも「蔵のまち」として知られる喜多方市。1万1千世帯余りが暮らす市内には現在2千600棟もの蔵があります。

蔵は本来、穀物や家財などを収納しておく場所。しかし喜多方市には、醸造蔵や蔵座敷、店蔵、作業蔵、果ては、かわや（便所）蔵まであり、用途や造りも実に多種多様です。そして、そのほとんどが今も生活と深いかわりを持ちながら活躍しています。

人が暮らし、働き、店としても現役の蔵。使われなくなった蔵も、美術館や喫茶店として新たな役割を与えられています。

なぜ、喜多方にはこれほどまでに蔵が多く、生活に密着し、愛されてきたのでしょうか。その理由を、喜多方観光協会の石田新吉さんに教えていただきました。

にぎやかな往来と豊かな風土

米沢と若松城下を結ぶ街道「現国道112号」のまちとして栄えた喜多方は、藩政時代から物資の集散地でした。そのため、モノを貯えるための蔵が必要不可欠だったのです。会津藩の奨励により、醸造や漆器などの産業



多くの蔵は、明治以降に建てられたもの。人々の暮らしによりそいながら、ほぼ1世紀の時を過ごしてきました



三津谷地区のレンガ蔵。耐水性を高めるために軸梁をかけた三津谷のレンガは、照りがあって焦げ茶色をしています



農家蔵が並ぶ杉山地区。白漆喰と黒漆喰のコントラストが鮮やか

成功者の象徴としての蔵

蔵人気に拍車をかけたのが、喜多方を襲った二度の火事でした。明治13年に街の西側、同18年に東側を焼き尽くした大火がありました。焼け落ちた家のかたわらに土蔵だけは残り、その頼もしい耐火性を証明したのです。

富の象徴であり、しかも財産を火事から守る蔵。喜多方の男衆は、いつかは自分も蔵持ちに「この思いを抱きながら、仕事に励みました。そんななかで、40歳までに蔵を建てるのが男の甲斐性」という言葉も生まれたのです。縁組みの釣り合いをとるときにも、両家の蔵の数が目安になったといえます。

「快適なうえ、燃えない。しかも内装に凝ることができ、そんな理由で、贅をつくした蔵座敷も生まれました。代表的なのが、現在公開されている甲斐本家の蔵です。建築にあたっては、新潟県から棟梁として宇佐美与四郎が招かれ、東京の木場から選りすぐりの銘木が取り寄せられました。外壁を高価な黒漆喰で塗り込めた蔵の内部は、51畳敷の書院造り。大正12年に完成したこの蔵は、今も重厚な構えをみせています。

名匠と呼ばれた宇佐美与四郎と弟の与五平は、喜多方の名のある蔵づくりに数多く携わりました。兄弟の技術と蔵に寄せるロマンは、弟子となった地元職人にも伝えられていったのです。

職人たちの技がさえる

新天地を求めて喜多方にやってきた職人もいました。明治23年、27歳で三津谷地区に登り窯を築いた樋口市郎も新潟県から来た一人です。

彼が焼いたレンガは岩越鉄道（現JR磐越西線）のトンネルに使われたほか、東京で修行した地元のレンガ工、田中又一によって見事な建築物になりました。レンガは駅や銀行などの公共的な建物に使われることが多かったのですが、素材として適していたこと、西洋的なものへの憧れから、蔵にも用いられるようになります。100軒ほどある喜多方のレンガ蔵の中でも、とくに有名なのが登り窯の近くにある



縁起物の鶴のこて絵。今でも彩色がつつすら残っています

る三津谷地区の蔵です。小さな集落に8棟ものレンガ蔵が並び、エキゾチックな雰囲気を見せています。

一方、素朴な印象の中に職人の技が光るのが杉山地区の農家蔵。かつて笠などに使ったスゲ草の産地だった杉山では、毎年売り上げをまとめ各家持ち回りで蔵を建てたのだそうです。そのため、「一人勝ちはしない」という考えがあり、蔵は粗壁造りに統一されていました。そこで個性を競ったのが窓扉。趣向を凝らした窓扉には幾何学的な美しさが表現されています。また、上右崎地区などには、こて絵で個性を表現している蔵もあります。縁起物の鶴、鶴亀、魔よけのための鷹などが、こてを使って立体的に生き生きと描かれていて、実に見事です。

蔵は職人たちが腕を競う場でもありました。喜多方の蔵の文化を支えたのは、こうした職人たちの技だったともいえるでしょう。（談）

喜多方の人々の心意気を表してきた蔵。長い年月をかけ、試行錯誤しながら職人たちが作り出してきた、美しく機能的で快適な蔵。その姿は多くの観光客を魅了する一方で、百年前後の時を経て、老朽化、職人の高齢化による維持の難しさなど、さまざまな問題にも直面しています。それでも蔵は、次の世紀へ伝えていきたい魅力にあふれています。



喜多方を代表する蔵座敷、甲斐本家には、多くの観光客が訪れます